

# アフリカの人々と名付け 8

## 個を主張する詩としての名前

小馬 徹

### 詩的なフリカの命名

ここ何回かの連載では、赤ん坊の間近い死を予見する「叙死名」を取り上げて考察した。そして、「叙死名」は、名前を呼ばれる事によって子供が自分を作って行くという見方からの命名ではなく、親が他の誰かに対する強烈なメッセージを託して命名するというアフリカの命名慣行と深く通底し合っている事を明らかにし得たと思う。

端的に言えば、何にも増して、そうした命名の特徴は詩的である事だ。それは、既に名付けられたものの反復的な指示としての日常の人間の言葉とは対照的な創造の言葉、即ち「神の言葉」を用いる事である。詩的であるとは、いわば神적であろうと望む事だが、アフリカの名付けの尽きない魅力と驚きはまさにそこにあると、本連載の冒頭でも述べた。

### 詩としての名前と共同体

だが、類的であり「社会的な動物」であるはずの人間の一人が何かでも神たらんとすれば、必定、他者との鋭い緊張を生み出すに違いあるまい。「叙死名」などに詳しく見た通り、アフリカの名付けの大きな特徴である詩的な側面は、共同体と個人との間の矛盾と葛藤の結果であり、また原因でもあった。

だから、詩的な名付けの傾向は、濃密な共同関係を生きる定住的な農耕社会で際立っている。中でもこの傾向は、邪術や妖術という、不幸の原因を他者の側に求める信仰を重視する社会に特に強く見うけられるものだ。

共同体と個人との間の緊張関係は、連れ合いを揶揄する名付けや、夫の親族でもある村人達を諷諭する名付け、ならびに「叙死名」に見られるだけではない。以下に見る自らの矜持を示す誇らかな詩名もまた、それが詩的であるがゆえに、共同体の論理と鋭く対立する可能性を既に秘めていると言えるのだ。

### 同名を許さない社会、望む社会

ところで、命名という行為には特定の対象をそれと認定し、指示する事と、ある範囲の対象を同じ範疇として括る事の両面が併存している。一郎という名前はある個人を指示すると共に、その人が男性であり、恐らく最初の男児である事を予想させる（範疇化）。そこで、認定・指示の作用を絶対確実にしようとするれば、少なくとも同時代（共時）的には同名者を排除する必要が生じて来る。

事実、世界には、社会全体がその方向に最大限の努力をするトラック環礁の島々のような所も確かに存在する。グッデナフの報告によると、1947年に人口793のロモヌム島で記録された個人名は789であり、偶然重複したのは外来のごく僅かな名前だけだった[出口顕「野性の名前」『思想』813, 1992]。

だが、トラック環礁の事態は例外だ。遥かに大規模な社会でも事実上不都合はない。

「固有名詞は常に英語の定冠詞が表すような機能をそれ自体中に含んで」いて、「使われている特定のコンテキストで、常にある特定の対象を指している」とわれわれに予想させ

る」からである〔池上嘉彦「命名の詩学」『言語』6（1），1977〕。常日頃、政治家の小沢一郎氏と職場の同僚の小沢一郎氏を区別出来ないと悩んでいる人はいそうもあるまい。

だから、成人男性の名前が6つ、成人女性の名前が4つというヴェネズエラのパナレ人〔出口 顕，前掲書〕の例は極端だとしても、個人名の変移が乏しい社会は珍しくない。登録できる個人名を基本的には聖人や歴史上の英雄の名に限るフランスや、既知の名前に限定するドイツがその好例である。

### モシ人の苗字と「戦名」

オートボルトのモシ人の間でも、全く前例のない名前を付ける事はまずないという〔川田順造「モシ族の命名体系」『民族学研究』43（4），1979〕。モシ人は、本人の名と父系的な一種の苗字を組み合わせる個人名としている。川田は、その両方が当人にとってはア・プリオリであり、また「命名された当人を他者が指示する『他称』である」と言う。

モシの苗字は、父系氏族のある範囲の者の共通の始祖が名乗った「戦名」に由来する事が多い。「戦名」は、普通の文からなる次のような一種の箴言である——「驢馬の足枷綱をはずすことはできても、持ち前の性格から人を解き放す事はできない」（気をつけろ、俺の気性はどうにもならないんだ）、「小蟻は骨を運べない、そこに残しておくしかない」

（俺にかまうな、俺をどうかするにはお前は小者すぎる）、「他人の小山羊はものを壊すが、お前自身の小山羊はものを壊さない」（手前が悪いのに俺のせいにするな）、「（食用になる）とかげがパルミラ椰子の木に登ったら、肉を食べたいという欲望をあきらめるしかない」（俺はお前なんかの力の及ばないところにいる）。そして、苗字は、始祖の「戦名」の（最初の）一語を取ったものである。例えば、Yirgaという苗字は、「雀（yirse:yirga

はその単数形）が百羽集っても、茂みを脅かすことは出来ない」という「戦名」の最初の一語から出ているのである。

### 詩名としての「戦名」と共同体

民族間戦争が止んだ今日でも、モシでは「戦名」を唱えられるのは名誉である。村人の「戦名」は草取りの共同労働の際に唱えられ、働き手の士気を鼓舞する。王や家臣、地方首長の「戦名」は、先祖祭や王宮の儀礼の後の酒宴で楽士が太鼓を叩く中で朗誦される。

「戦名」は、時には古老の知恵を借りて成人が自ら付ける「自称」で、戦いや争いの場で他者を威圧するための名だ。だが、日本の武士の名乗りのように自ら唱える事はなく、上のような特定の機会に、他の誰かが太鼓の伴奏や節を付けた大声という非日常的な手段で一度に大勢に聞かせるものだった。

川田はまた、「戦名」がア・プリオリな個人名の「類」化を免れて「個」の差異化と誇示を意図するものであり、『類』の秩序としての共同体への攻撃を孕むものである」とも述べている。そして、「戦名」を自ら唱えないという抑制は、そうした反共同体的性格に由来する両義性の反映でもあらうと推測する。

モシ人の「戦名」は、その詩的な性格から「詩名」(poetic name)の一種と考えられよう。これに類する詩名の詳細な報告は寡聞にして知らない。ただ、私自身が調査したケニアの牧畜民、キプシギス人の間にも、やはり戦の勲功に因んで付けられるよく似た詩名が存在している。しかし、あくまでも平等主義的なキプシギスでは、その社会的な意義はモシとかなり異なっている。両方の「詩名」を比較してみると、詩と名付けの社会的機能や記憶、更に支配の発生をめぐって興味深い問題が洗い出されて来るように思われる。

（こんま とおる 神奈川大学社会人類学）